The Japan Society for the Study of Education

実際に中産地主がリーダーシップを取っていることが明らかにされていることである．麓の道は違っても，玉利と横井は同じ嶺を目ざしていたことになる．

その4は，産業教育，特に農業教育の場合は，地域差が大きいため，地域実態史の研究が不可欠であるが，本書では，「東北型」として山形県の庄内地方，「西南型」として愛媛県の中予地方を子細に分析していることである．この手法は，米作だけでなく養蚕，染織などにも役立つと思う．

その5は，中央および地方の農会報の資料的価値が示されたことである．特に地方農会の出版物の中に多くの情報が含まれていることが分かる．

私としては，本書を学ぶ中で，いくつかの課題をつきつけられたように思う．例えば，本書で「農民の学習と農民の教育は表裏一体の関係」にあったと言うとき，その関係の構造を考えてみたい．収益を伸ばす目的で，先進稲作技術を学び，自ら試行して得た苦労の成果を，なぜ他人に教える必要があったのか，という素朴な疑問が生まれる．そこには，「技術」の次元を超えた，横井時敬の言うような「精神」の要素はなかったのか，あるいは，農事講習や農事改良に関係した上層農民は，自らの教育課題をどのように認識していたのか，その他を含めて，学校教育との接合点を探り出してみたいと思う．

高い姿勢から，人様の研究成果を論評することを苦手としているため，本書から私自身が学び得たことを列挙することで，紹介にかえさせて貰う．学び合いの中から農事改良が進捗したという本書の主張を大切にすることにもなろうから．

（日本図書センター刊　2002年3月発行　A5判　334頁　本体価格5,400円）

佐藤 一子 著
『子どもが育つ地域社会
学校五日制と大人・子どもの共同』

住田　正樹（九州大学）

本書は，社会教育研究を志した当初から「地域の教育力」問題に関心を持ち続けてきた著者が，地域からの教育創造の実現に向けての条件と可能性を検討することを課題として執筆されたものである．構成は以下のようである．「序章　子どもが育つ地域社会」，「Ⅰ章　子育て困難から共同の子育てへ」，「Ⅱ章　地域の教育力をどうとらえなおすか」，「Ⅲ章　地域社会における子どもの居場所づくり」，「Ⅳ章　子どもＮＰＯと地域ネットワーク」，「Ⅴ章　学校と地域社会の協働」，「Ⅵ　地域教育計画と住民の参加」．

序章に著者の主張が集約されていると言ってもよい．「地域の教育力」の現状と課題が簡潔に整理され，何が当面の問題なのかが分かりやすく語られて充実した内容になっている．まずは序章を読んで問題点を整理し，最後に再度序章を読み直して本書の主張をまとめるという読み方をしてもよいのではないか．序章のタイトルがそのまま本書のタイトルになっているのも頷ける．

本書の特徴は，第一に，著者自身も述べているように，「子どもたちが育つ場・親たちが参加する場としての地域社会を構造的に把握しようとしている」（216頁）ところにある．それは地域社会を大人と子どもが共同し，参加する，さまざまな関係性の重層的なネットワークと捉えるところに見いだされる．著者が地域社会を関係性の重層的なネットワークとして構造的に捉えようとするのは，そのことによって「地域の教育力」を具体的な事実の問題として捉えて，その意義を考察し，その再生を図ろうとする強い問題意識から出発しているからである．これまで「地域の教育力」は学校と対等な教育的意義を持つようには捉えられず，学校の補完的機能としか考えられてこなかったが（4頁），それは「地域の教育力」を経験的な次元で具体的に捉えようとしてこなかったため，「理念的・抽象的に理解されがちになり」（43頁），説得力に乏しかったからである．地域社会を重層的なネットワークとして捉えようとする本書は，その意味でこれまでの「地域の教育力」論を大きく前進させたといってよい．地域社会の日常的な，重層的なネットワークから形成される共同性にこそ「地域の教育力」の独自性が存在するのだと著者はいう．そのことを地域の共同子育て活動を事例にして説明しているのがⅠ章である．そして，こうした地域社会の共同性と自治体との相互協力関係が「地域の教育力」の再生に繋がっていくのであるが，それは具体的には，父母・住民の自主的な教育文化活動，地方自治体の教育文化環境整備，学校と地域の対話という三つの内容をもつのであるとする（8頁）．こうした視点からこれまでの研

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for the Study of Education

究の流れを整理したのがⅡ章であり，Ⅲ章以下はこうしたそれぞれの視点からアプローチしていった論文から構成されているというのが本書の全体構成である．

本書の特徴の第二は，子どもを地域社会のなかでの主体的存在として捉えようとしていることである．子どもを主体的に捉えようとする視点自体はこれまでにもたびたび試みられてきたことであって新たな視点というほどのことはない．しかし，これまではともすれば主体的という抽象的な言葉のみに終わっていたのではないか．これまでは，本書の言うように「子どもが育つ地域社会」としてではなく，主体的とは言いつつも大人の側から子どもを客体として捉えてきたのではないのか．だが，本書は文字通り「子どもが育つ地域社会」として子どもを主体的に捉えようとする．それは，「共同」という概念に表れている．この共同には二つの意味がある．一つは地域の大人どうしの「相互の共同的な関係性」(12頁) を指しているが，もう一つは地域の大人と子どもの関係性を指す．そしてそうした関係性のなかに子どもが「参加」(13頁) することによって大人と子どもの共同性が生まれ，そうした大人と子どもの共同の関係性の重層的なネットワークこそが地域社会なのである．これが「子どもが育つ地域社会」にほかならない．

そして第三に「地域の教育力」を文字通り「地域」の教育活動として捉えようとしていることである．これまでは「地域の教育力」と言いつつも学校を軸としての「地域」でしかなかった．だからこそ「地域の教育力」は学校の補完的機能でしかなかったのである．しかし，本書は「地域の教育力」の独自性を示すことによって「地域の教育力」を学校とは相対的に異なるものとして捉えようとしている．それが地域社会の共同性である．そしてその共同性は地域社会において営まれる共同的な生活それ自体のなかに形成されるのであって，そこに子どもの「育ち」を見いだしているのである．その意味で本書は正に「学校から地域へ，まなざしの転換をこころみ，その視野から従来の議論を再構築しようとしている」(213頁) のである．

本書は，「地域の教育力」を子どもに焦点を合わせて論じているとは言っても，その問題の全体をカバーしているわけではない．例えば，著者自身も述べているように，「自分のことばをもっていない」(83頁) 思春期前半（小学校中・高学年から中学生に至るまで）の子どもについてはさらに検討が必要だろう．もっともこれまでの，子どもに対する地域社会の取り組みは，せいぜい幼少期から小学校低学年の子どもたちに対するものであって，小学校中・高学年から中学生に至るまでの最も地域活動の活発な，あるいは地域活動に参加させるべき年齢層に対しては殆ど何も論じてこなかったから，それは「地域の教育力」論全体の問題であって，本書だけの問題ではない．むしろ本書では，Ⅲ章で「子どもの居場所づくり」として中学生・高校生の地域への参加を論じ，新たな視点を提供している．

そして私自身の関心から言えば（私は教育社会学を専攻しているので視点が多少違うかも知れないが），地域社会を関係性の重層的なネットワークとして捉えるのはよいとして，その共同的な生活の営みに参加することによって子どもが発達していく，その発達の内容にいかなる独自性があるのかが問われなければならないと思うのである．これまでの「地域の教育力」（私自身は，概念の曖昧な，この用語を好まないが）論の最も大きな問題はこの点ではないのか．そしてその発達の内容の独自性にこそ「地域の教育力の再生」の意義があるのではないかと思うのである．

本書は，残された課題もあるが，著者の専攻する社会教育学ばかりでなく，「地域社会と教育」問題を対象とする教育社会学，教育行政学，教育法学等にも新たな視点を提供してくれるだろうと思われる．

（東京大学出版会　2002年10月発行　B 6 判
231頁　本体価格2,500円）

住田 正樹・南 博文 編
『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』

佐藤　一子（東京大学）

本書は，1990年代後半から住田正樹氏が中心となって組織した「子どもの居場所」に関する共同研究の蓄積とその後の3カ年にわたる科学研究費補助金基盤研究の成果をふまえて刊行された学術研究書である．教育社会学のアプローチを中心としながら，環境心理学，発達心理学，人文地理学，

NII-Electronic Library Service